

## 過去への執着という病

——マルティン・ヴァルザー『幼年時代の保護』における主人公の死をめぐる

渡 辺 将 尚

1

マルティン・ヴァルザー (1927-) が再統一直後の1991年に発表した長編小説『幼年時代の保護 (Die Verteidigung der Kindheit, 以下『幼年時代』と略す)』は、1929年生まれの主人公アルフレート・ドルンが、53年に東独ドレスデンから西ベルリンへ逃れ、そのまま西独で87年に死亡するまでを描いたものである。したがって、この作品の舞台は主に西独ということになるが、アルフレートは東独に残してきた母や親戚を頻繁に訪れており、また途中回想という形で東独での幼年時代、あるいは15歳で遭遇したドレスデン空襲の様子なども描かれ、作品の構造は空間的意味でも時間的意味でも多層的である。ここに、互いに異常なまでの執着を見せるアルフレートと母との関係、ホモセクシャル、東西分裂など種々の問題が織り込まれ、さまざまな読みの可能性が提供されている。

しかし、この作品においてヴァルザーは、上記のモチーフに加えて、「過去といかに向き合うか」という問題をも取り上げている。しかもそれが作品の中心的課題であることは、表題からも容易に推測される。すでに成人に達した主人公について幼年時代の保護を問題にするということは、明らかに、過去となったその時代をいかに記憶に留め保存するかということにつながるからである。

このドイツの「過去」という問題意識は、「アウシュヴィッツ裁判」を熱心に傍聴した体験から生まれ、忘却に対して強く警鐘を鳴らすエッセイ「私たちのアウシュヴィッツ (Unser Auschwitz)」(1965) 以来、ヴァルザー自身がくり返し追求してきたものである。しかし、そのようなイメージを持って『幼年時代』を読むと、その奇妙な結末に疑問を感じざるを得ない。なぜなら、異常なまでに過去に執着し、過去の事物を集め続けるアルフレートは、その目的が果たせないまま死亡してしまうからである。これは、過去の事物をすべて収集することなど不可能であるという諦念を表明したものののだろうか、それとも、ここにおいてこれまでにない「過去」に関する新たな思考が展開されているのだろうか。

近年あまり議論されることなくなった本作品であるが、あえてここで取り上げるのには以下のような理由がある。つまり、ナチズムへの反省を放棄することを宣言するものと捉えられ、物議をかもしだすこととなったあの講演——1998年10月11日、ドイツ書籍出版・販売協会平和賞の

受賞に際してヴァルザーが行った講演（以下、「平和賞講演」と言う）<sup>1</sup>——を正しく理解するために、『幼年時代』は重要な鍵を与えてくれるように思われるのである。

「平和賞講演」において、たしかに紛らわしい言い回しが用いられていることは事実である。たとえば、

「私は目をそらすことを学ばなければなりませんでした。」<sup>2</sup>

「強制収容所の様子を映した一連のもっとも残酷な映像から、たしかに私はすでに20遍も目をそらしました。」<sup>3</sup>

しかし、本稿の議論を少し先取りしてしまえば、平和賞講演での主張の根はすでに『幼年時代』にあり、『幼年時代』を理解せずして平和賞講演を正しく理解することはできない。『幼年時代』がヴァルザーにとって再統一後初の長編小説であることを考慮すれば、この作品がその後のヴァルザーを理解する鍵となることも容易に推測できよう。

以下ではまず評論あるいは論考を参照しながら、主人公の死というモチーフがどのように捉えられてきたのかをまとめ、それらの捉え方の問題点を探る。ついで、正しい理解に立った際に、本作品がいかに平和賞講演に結びついているかを見ていきたい。

## 2

1945年2月13日のドレスデン空襲により街が壊滅的な被害を受けて以来、アルフレートは、過去に存在したあらゆるものを保存しておかなければならないと考え、実際に行動に移し始める。彼がまず最初に行ったのは、写真の収集であった。やがてアルフレートは、自らに対して3つの課題を課す。1. ザクセン公国のブリュール伯に関する歴史小説の執筆、2. 法学博士号の取得、3. 自分の過去を写すすべての書類、写真、証言の収集である。このうち、もっとも重要なプロジェクトはもちろん3であり、ここに彼は異常なまでの執着を見せる。

エーリヒ・ヴォルフガング・スクヴァーラは、アルフレートの生涯をまとめつつ、こうした過去への執着の果てに訪れる死について以下のように述べている。

「過去を何よりも上位に置き、幼年時代を大人たちから保護しようとし、（その結果）すべて

1 当時のドイツ・ユダヤ人中央評議会議長イグナーツ・ブービスが、この講演にはドイツの罪を軽視する側面があると激しく非難し、さまざまな人物を巻き込んだ論争に発展した。「ヴァルザー・ブービス論争」と呼ばれている。

2 Die Walser-Bubis-Debatte. Eine Dokumentation, Herausgegeben von Frank Schirrmacher. Frankfurt am Main (Suhrkamp) 1999. S.8. 傍点は引用者による。

3 ibid. S.11. 同様に、傍点は引用者。

が崩壊し水泡に帰すことを思い知らなければならないひとりの人間……」<sup>4</sup>

先述のように、アルフレートはドレスデン空襲以来、過去の事物の収集を始めるが、1960年の母の死以降、その収集熱にはますます拍車がかかり、病気とも言える状況が描写されていく。しかし、自らの過去に関わるすべての事物を収集する試みなど当然成功するはずはなく、また、現在よりも過去に優位を置く生き方など可能であるはずはなく、アルフレートはその報いを受けるかのように、58年という決して長いとは言えない人生を終えることとなるというわけである。

ウルズラ・ラインホルトも、基本的な読みにおいては同じ立場にある。彼女はまず、作品の結末近くで、ドレスデンの学校時代の級友たちが会する同級会の様子が描かれていることに注目している。バイエルン州北西部のアンスバッハで行われた同級会の後、アルフレートと、途中まで同じ列車に乗って帰るハンス・グルリットが、駅のホームで言葉を交わす場面がある。この場面について、ラインホルトは以下のように述べる。

「ふたたび駅のモチーフを取り上げることによって、この一風変わった人生（＝アルフレートの人生）……が終わりに差し掛かっていることを暗示している。」<sup>5</sup>

この作品は、1953年、アルフレートが西ベルリンに逃れるため、両親に見送られてドレスデンの駅を後にする場面から始まる。作品の結末近くでふたたび駅の描写が取り上げられるということは、この物語が終わりを告げる、つまり主人公アルフレートが死ぬことの暗示なのだということ。もとに戻ることが終わりを予期するとはどういうことだろうか。ラインホルトはさらに以下のようにつづける。

「たしかにヴァルザーは、突然の死の原因を、薬による事故か自殺かの間で宙づりにしているが、ドルン（＝アルフレート）が生において（am Leben）、つまり現実に生を営むために必要であるものにおいて挫折した（gescheitert）という点を見過ごすことはできない。」<sup>6</sup>

もとに戻るといえることは発展がないという意味であり、母の死以来ますます過去に没入していくアルフレートは、まさに現実における発展を放棄した存在である。そのような存在はもはや現

4 Erich Wolfgang Skwara: Ein Parzival-Roman der deutschen Teilung. Martin Walsers *Die Verteidigung der Kindheit*. In: Leseerfahrungen mit Martin Walser, Hrsg. v. Heike Doane u. Gertrud Bauer Pickar. München (Fink) 1995. S.192. 引用文中のイタリック部分は原文のまま。本作品のタイトルにある *Verteidigung* の動詞形 *verteidigen* を用いていることを強調するためである。

また、「……」は引用する際に省略した部分があること、（ ）内は引用者による説明であることを示す。以下の注釈でも同じ。

5 Ursula Reinhold: Figuren, Themen und Erzählen, *Die Verteidigung der Kindheit* in ästhetischen, poetologischen und politischen Kontexten, In: Leseerfahrungen mit Martin Walser, S.202.

6 *ibid.* S.202f.

実の世界で生きていくことはできない。それを象徴的に表しているのが駅のモチーフであるとラインホルトは主張する。

ヨーゼフ・フォン・ヴェストファーレンも、困難に直面すると、映画を見に行ったり、故郷の母のもとに戻るアルフレートの姿を、発展の放棄と見ている。

「大人の世界を、彼は敵だと思っている。だから、子供のままでいたいのだ。」<sup>7</sup>

その上で、ヴェストファーレンは、アルフレートの生涯全体を以下のようにまとめる。

「アルフレート・ドルンほどだめな登場人物はこれまでになかった。ヴァルザーは、だめさをこれほどまでに徹底的に描いたことはなかった。」<sup>8</sup>

子供のまま、つまりだめな人間のまま、アルフレートは死んでいくのである。

先にラインホルトからの引用で示した「生において挫折した」とまったく同じ言い回しを用いているのは、ゲラルト・フェッツである。フェッツは、すでに述べたアルフレートが自らに課した3つの課題に触れた後で、それが達成できないままに訪れた彼の死について以下のように説明している。

「1987年、ついに彼は過量服薬によって死ぬ。自殺だったのか、事故だったのか？ヴァルザーはこの問いを未解決のままにしているが、ドルンがもう終わりであること、つまり生において挫折した (am Leben gescheitert) ことは確かである。」<sup>9</sup>

他の箇所でもラインホルトについて言及していることから、この引用は当然ラインホルトの論考を踏まえて言われたものである。しかしこれはフェッツ自身の立場でもある。彼は、「幼年時代の世界を現在において救い出」<sup>10</sup>そうというアルフレートの行為を、「外的な生と内的な生の分裂」<sup>11</sup>であると捉えている。つまり、アルフレートが現実の生においてうまく立ち回ることができないのは、過去の収集という自らの目標のみに重きを置き、現実からも、成長することからも逃亡しているからであり、その過去の収集さえ困難に直面し危機に瀕した時、その帰結として死が訪れたということである。アルフレートの死を生破綻の当然の帰結と捉えているという意味において、フェッツとラインホルトは同じ読みを共有していると言える。

---

7 Joseph von Westphalen : Ein deutsches Muttersöhnchen. In: Der Spiegel. 33/1991 (12.08.1991) S.173.

8 ibid. S.174.

9 Gerald Fetz : Martin Walser, Sammlung Metzler Bd.299. Stuttgart, Weimar (Metzler) 1997. S.142

10 ibid. S.141.

11 ibid.

## 3

これらの論考はいずれも、主人公の死を、現実あるいは発展・成長から逃避した当然の帰結と捉える点で一致している。しかし、冒頭に述べたような、ヴァルザーのそれ以前の著作から見える態度との矛盾——徹底的に過去と向き合う姿勢と、過去の事物の収集における挫折——に関しては、何ら解答を与えてくれているわけではない。以下ではいよいよこの点について考えていくことにしよう。

死を現実逃避の帰結と捉えた時、もっとも違和感を覚えるのは、アルフレートの死に続いて作品の最後に登場する葬儀の描写である。以下の引用は、アルフレートが信頼を置いていた友人ドゥ・ボンヌショーズが妻ティーナとともに、葬儀を終えて帰途につく場面からのものである。

「ドゥ・ボンヌショーズ博士と妻がもう自分たちの車のすぐ近くまで来ていた時、ブリューメルと名乗る夫人から声をかけられた。彼女は包みを一つ差し出した。ドゥ・ボンヌショーズがためらっていると、ティーナが手を出して受け取った。ティーナは包装紙がDDR (=東独)のものであることに気がついた。ブリューメル夫人は言った。ドルン氏は過去のあらゆるものを収集しており、きっとどこかに保管してあるはずだ、と。…ティーナ・ドゥ・ボンヌショーズは、ブリューメル夫人にいっしょに帰りましょうと誘った。彼らは夕方までずっとアルフレート・ドルンの話をした。」<sup>12</sup>

「ブリューメル夫人」とは、西へ逃れたアルフレートに代わって、ドレスデンで母の面倒を見ていた人物である。彼女が渡した包みの中身が何なのかは明かされていないが、アルフレートを想い、ドルン家あるいはドレスデンと関わりのあるものを持ってきたことは確かである。

ここで不自然なのは、異常なまでの穏やかさに包まれた全体の雰囲気である。アルフレートは、経歴だけを見れば、上級公務員としてさまざまな部署を歴任したエリートだと言える。しかし、その内実は、公務員試験対策に通った講座で日々笑い物にされるなど、苦悩の連続であった。また、過去の事物の収集においても、彼はさまざまな人物に手紙を書いたり、ドレスデンに帰郷する際に必ず入手するものリストを作ったりと、ありとあらゆる手段を行使したが、実際に手に入れられたものは少なく、作業は困難を極めた。

アルフレートが生前あれほど苦勞して手に入らなかったものが、たとえ一部であったにしても実にあっさりと提供され、人々から嘲笑され疑心暗鬼になっていた彼の死を皆がこぞって悼むという、この予定調和的な世界は、現実から乖離した主人公の当然の帰結と捉えるには無理がないだろうか。別の言い方をすれば、主人公の死の後に描写されるこの予定調和こそが、作品全体の

12 Martin Walser : Die Verteidigung der Kindheit, Werke in zwölf Bänden, Frankfurt am Main (Suhrkamp) 1997, Bd.11, S.509. 以下 Werke と略し、巻数とページ数のみ示す。

意味を決定するもっとも重要な部分なのではないだろうか。

\*

予定調和的な葬儀の場面が描写される前に、あたかもそうなることを暗示するかのような部分がある。アルフレートの死を報告した直後、語り手は以下のように言う。

「人は何かを行いながら、(同時に) 何かが身にふりかかる存在なのだ。皆、何もかも終わりにしたいと思っている。しかし、まるでもっとも過激なことを望む傾向がないかのように、たえず最小のことをしつづけなければならない。救いはない。救いほど不必要なものはない。すべてが始まる前に決着がついている。決着がつかないうちには、何も始まらない。」<sup>13</sup>

非常に抽象的で難解な表現であるが、それらが具体的に何を指すのかを1つ1つ明確にしていけば、理解することができる。

まず、「何かを行いながら」「何かが身にふりかかる」というのは、行動する限り、かならず何かが起こってしまうということである。その「何か」とは、この場合、文脈から当然死を指す。つまり、行動することによって死んだ人間とは、アルフレートであり、その行動とは、過去の事物の収集ということになる。

一方、他の人間たちは、「何もかも終わりにしたい」という「過激なことを望」みながら、まるでそんな欲求が存在しないかのように、つましく暮らしている。しかし、そのような生活は、「救いはない」と言われているように、否定的な意味しか持ち合わせていない。なぜなら、「すべてが始まる前に決着がついている」、言い換えれば、すべてのことについて「こう行動しなければならない」という答えは決まっておき、人々はその枠内で「最小の」行為ができるだけだからである。先ほど指摘した葬儀の場面における予定調和と同じものを、この引用でも見ることができる。

それと対極をなすのが、「もっとも過激なこと」である。ここで言う「もっとも過激なこと」とは、「何もかも終わりに」することである。しかし、何もかも終わりにしたいと望みながら、人々はそれを口にすることはできない。あらかじめ決められた暗黙のルールに反するからである。ただし、正確を期すために言うておけば、この暗黙のルールは、終わりにすることを禁じるものではない。終わりにしたいと言うことを禁じるのである。

では、人々は何を終わりにしたいのだろうか。このことについても、引用文に沿って考えていこう。「皆、何もかも終わりにしたいと思っている」という文は、直前の「人は何かを行いながら、何かが身にふりかかる存在なのだ」を受けて言われたものである。だとすれば、人が何もかも終わりにしたいのは、自分の身に何もふりかからないようにするためであり、何もふりかからない

13 ibid. S.506f.

ようにするためには、何も行動しないのがよいということになる。このように考えてくれば、人々が何を終わりにしたがるかは、すでに明らかである。先に確認したように、ここで言う行動することとは、過去の事物を収集することであるから、人々が終わりにしたいのは、過去に触れること、つまり、まさにアルフレートが行っていたことである。本当は誰も過去を見ずに過ごしたい。その一方で、皆、たとえ自分が引き受けたくないと思っていたとしても、誰かが過去を振り返らなければならないことは分かっている。それを引き受けたのがアルフレートであり、彼が病的であったのは、人々にとってはなおのこと幸いであった。それによって、過去にたずさわらない自分が自動的に正当化されるからである。

「クラブロート夫人は、毎日、現実に戻り生活を続けるように、彼（＝アルフレート）に求めた。」<sup>14</sup>

「クラブロート夫人」とは、アルフレートの下宿の大家である。彼に現実への回帰を求めるこの言葉は、ここだけを読めば、たしかに彼の生活を案ずる良心的な声に聞こえる。クラブロート夫人自身も真摯な気持ちからこの言葉を発し、自らの良心を微塵も疑っていないことは、文脈から明らかである。しかし、彼女に代表されるこの無意識的な道徳心は、何より過去を見ないことによって成り立っているものなのである。

行動することは苦しみを背負うことでもある。なぜなら——この点については先行研究の指摘は正しい——過去を徹底的に追求していくことは、必然的に世の一般の人間とは異なった生活を営むこととなるからである。アルフレートは、過去の追求だけでなく、それにとまなう苦しみをも一手に引き受けることとなった。他方、過去との関わりを一切もたない葬儀の参列者たちは、やっかいな使命をアルフレート一人に押しつけることによって、これまで通常の平凡な生活を送ることができたし、また彼を記念碑的に扱うことによって、これからもそのような生活を続けることができる。

「彼（＝アルフレート）はこれからどこに眠るべきか。遺言で指示するまでもなく、親しい人々は知っていた。アルフレート・ドルンは、ベルリン、つまり子羊が取り去られた墓に埋葬されるべきであることを。」<sup>15</sup>

これらの文をもって、『幼年時代』は終わりを迎える。「子羊が取り去られた墓」とは、アルフレートが建築家に設計を依頼してまで母のために建てた墓のことである。設置後何者かによって子羊の像は盗まれてしまったが、この墓はまぎれもなく、過去に対するのと同様、アルフレートが異

14 ibid, S.297.

15 ibid, S.510.

常なまでの愛情を示した「母の思い出を具体化する (die Gestaltung des Andenkens der Mutter)」<sup>16</sup>、つまり母を記念するためのものである。その墓にアルフレートも埋葬されるということは、彼自身も記念される者となることを意味する。

必要と分かっているが誰もしようとしないことを、アルフレートは一人で引き受け、その犠牲となって死んだ。人々は、彼を、まるで危険な冒険に挑みその最中に命を落とした英雄のように扱い、その死を称えることで、また平穏な暮らしに戻っていく。

これこそが葬儀の場で皆が見せる安堵感であり、予定調和的な世界の理由である。

#### 4

したがって、アルフレートはたしかに病的ではあるが、過去の収集自体、否定的なものではない。批判の対象となっているのは、むしろ他の人間たちの方である。作品中1箇所のみであるが、アルフレートの思考を借りて、ドイツの過去の罪およびそれに対するドイツ人の態度について言及される部分がある。アルフレートの動向ばかりを追う読者には、副次的にしか捉えられず、ともすれば見落とされる可能性すらあるが、本稿のスタンスから言えば、非常に重要な部分である。

「アルフレートは、作家や哲学者や政治家が公の場でドイツの罪について語る時、いつも興味をもって耳を傾けた。彼は、ただ彼らが他人の罪について語っているような印象をもった。もしかしたら、彼らには自分の罪というものがないのだろうか。だとすれば、彼らは自分が分からない事柄について語っているということになる。そもそも自分の罪以外の罪について語るができるのだろうか。」<sup>17</sup>

知識人たちはドイツの罪について語るが、語る姿はまるで他人事である。彼らは、過去のドイツと今の自分自身を完全に切り離している。そこにアルフレートは違和感を覚える。彼は完全な病人ではない。根底にきちんとした思想をそなえている。彼に問題があるとすれば、それは、自らの過去に異常なまでに執着するという、思想を現実社会で実現する際の方向性、および方法論にあるに過ぎない。

ふたたび先に紹介した先行研究に戻ろう。そこでは、アルフレートの死が、現実から乖離した主人公の当然の帰結と捉えられていた。そうした捉え方自体、またそれで考察を終了し作品の最終場面に目を向けないこと、それらがいずれも誤りであることは明らかである。

まず、アルフレートは現実から決して乖離してはいない。彼は、隠遁生活を送るわけでも、人との交流を一切絶っているわけでもない。すでに述べたように、上級公務員というエリートですらある。むしろ、乖離という観点から見れば、乖離しているのは知識人たちの方である。彼らは、

<sup>16</sup> ibid. S.297.

<sup>17</sup> ibid. S.304.



あたかもドイツの過去とは無関係であるかのような論法で話をすることによって、自らをドイツの過去から乖離させている。それらの知識人をはじめとして、人々がそのように過去を忘れ、のうのうと暮らしているのが、現実の社会である。アルフレートは、現実とではなく、過去を忘却した人々と一線を画した場所にいるだけなのである。<sup>18</sup>

また、彼の死もその帰結として生じたわけではない。テキストの上でも、自殺と事故の2つの可能性が示されるが、どちらかに決められる決定的な証拠はない。つまり、死因を決める必要はないのである。語り手が、主人公の死について、その原因にすら口を閉ざしている状態で、読者が死の経緯をさらに詮索しようとすれば、それは単なる想像力の産物ということになる。

とすれば、語り手がここで主人公の死に言及する理由は1つしかない。葬儀の場面の予定調和を描くためである。

\*

『ドルレとヴォルフ (Dorle und Wolf)』は、まだ誰も再統一が実現するとは思っていなかった1987年に、東西分裂を主要なテーマとして取り上げた中編小説であるが、ここでもドイツの過去は重要なテーマの1つとなっている。主人公ヴォルフは、東独から西独に送り込まれたスパイであるが、西独での生活を続けるうち、分裂がいかに過去への真摯な反省を阻害しているかに気づく。

「ヴォルフは西に来て、ここで東がどれほど失われてしまったかを発見した。彼は、共有していたものすべてに対して冷淡さが増しているのを目の当たりにした。DDRで生じる出来事に対する著しい無理解、高飛車な無関心、思い上がりを。どちらも、拒絶という点において相手を上回ろうとしていた。」<sup>19</sup>

東西両ドイツはいがみ合い相手を拒絶しているが、ヴォルフによればその原因は、かつて双方が互いに「共有していたものすべて」を否定していることにある。「共有していたもの」とは、分裂以前のドイツが経験し蓄積してきた、良き伝統も負の遺産もふくめた歴史全体のことである。<sup>20</sup>ここで、『幼年時代』との共通点は明らかである。いずれにおいても、現在から過去を（あるいは、過去から現在を）切り離そうとする人々が批判されている。また、そのようにして現在のみに生きる彼らが、そこで自己完結してしまっている点も共通である。そうした人々の態度を主人公たちが批判的に観察することができるのは、彼らが東西両ドイツの国境を——実際においても、思

18 過去を忘却した人々を中心となって現実の社会を形成しているわけだから、これをもって、現実からの乖離と言えなくもない。しかし、本論で紹介した既存の研究は、そのような理解ではない。明らかに、アルフレートを地に足のつかない、現実味のない生を送る者として捉えている。

19 Martin Walser : Dorle und Wolf, Werke, Bd.5, S.768.

20 これらの解釈に関する詳細については、拙論：「片割れとなった者たち——マルティン・ヴァルザー『ドルレとヴォルフ』——」（『文学における不在』森本浩一他編，原研二先生追悼論集刊行会，2011年，201～212頁）を参照。

考においても——絶えずまたぎつつ活動を行う人物であるからに他ならない。

しかし、自らを過去と分断するという行為を、人々が意識的に行っているかということになると、2つの作品の間では違いが生じてくる。まず、『ドルレとヴォルフ』において、ヴォルフは西ドイツの人々を以下のように描写する。

「すべての者たちが、成功に光り輝いていた。しかし、誰も満ち足りているようには見えなかった。彼らは、自分たちに何が欠けているか知らないのだ。」<sup>21</sup>

「欠けている」ものとは、ここでは直接的には東ドイツを指すが、すでに述べたことから明らかのように、それによって東西両ドイツに共通の過去まで失ってしまっていると解釈してよい。この引用文において重要なのは、人々がそれを「知らない」ということである。知らないからこそ、外見上は「光り輝いて」いるが、よく観察してみれば——この「観察」自体、ヴォルフに与えられた特権なのであるが——そこには満たされない何かがあるというわけである。

一方、『幼年時代』では状況は異なる。東独・西独ともに、意図的に過去を忘却、破壊している様が描写されている。

「ここ（＝ドレスデン）で人々は廃墟をどのように扱っているか！共産主義者の市長は、廃墟と化したバロック時代の建物を、それがまるで団地アパートであるかのように爆破させた。彼は『社会主義的大都市』を建設したかったのだ。」<sup>22</sup>

「その間、特にヘッセンでは、思慮のない産業開発による過去の根絶を食い止めようと、法律が出来上がっていた。しかし、釘1本打ち込むにも許可が必要になるからと言って、自分の財産が記念物になることを望まない人々も多数いた。」<sup>23</sup>

2つの引用のうち、本稿においてより重要なのは、後者である。人々は、伝統的建物を保存していく必要がある（少なくとも州政府はそう考えている）ことを知っている。知っていながら、行動しようとはしない。過去よりも現在の生活を重視するからである。

そのような人間たちは、アルフレートの周りにも存在する。たとえば、彼の上司ブルクマンがそうである。

「アルフレートは、共産主義の蛮行によってドレスデンに残る歴史遺産が破壊されていること

21 Martin Walser : Dorle und Wolf, Werke, Bd.5, S.703.

22 Martin Walser : Die Verteidigung der Kindheit, Werke, Bd.6, S.116f.

23 ibid, S.441.

に関する新聞記事を、いつもブルクマン博士に見せていた。ブルクマン博士は憤慨はしたが、アルフレートほど、その話題について話す気はなかった。しばしば上司 (=ブルクマン) は、『ドルン君、ヴェッティン家からどんな新しいことが見つかったかね?』という言葉で部局会議を始めた。もちろん皆にやにや笑っていた。』<sup>24</sup>

「ヴェッティン家」とは、中世以来、ドレスデンのあるザクセン地方などを支配した名門貴族である。自らの過去、およびそれと深い関係のある故郷ドレスデンの過去を収集するアルフレートに、あえて「新しいもの (Neues)」を尋ねることで、ブルクマンは彼に理解を示さないどころか、揶揄してさえているのである。会議に参加している他のメンバーにもその意味は明らかで、皆が彼を嘲笑する。

ドイツ人たちが見せる態度は、結局はパフォーマンスでしかない。この作品において、古いものを保護することと、ドイツが犯した過去の罪を反省することとは、連動するものとして捉えられている。しかし、知識人たちの発言にしても (注釈17)、ヘッセン州の法律にしても (注釈23)、対外的なアピールにのみ長け、実際中身は骨抜きにされたままになっている。なぜなら、人々の意識は、まったく別の、あるいは正反対のところにあるからである。

## 5

1987年の『ドルレとヴォルフ』、1991年の『幼年時代』ともに、ドイツの過去の問題が取り上げられているが、それに対する人々の関わり方については、その描写に明確な差異があった。前者における人々が問題の存在にすら気づかない一方、後者では、もはや関わりたくないという本心を隠しながら、あたかも問題に真摯に取り組んでいるかのように演じている。

そのような変化は、何によってもたらされたのだろうか。ドイツあるいはドイツ人が変わったのだろうか、それとも、ヴァルザーの見方の方に変化が生じたのだろうか。

この問題を考えるために、時期的に両作品の間に位置する (正確には、『幼年時代』の執筆中であるが) エッセイ「ある作家の午前」(1990年12月初出)<sup>25</sup>を見てみよう。ヴァルザーはまず、ドイツ国内において、あたかも自分だけが正しく他のすべては間違っているとするような意見がまかり通っている状況を、批判的に描写する。

「ユートピアに向かう旗印を掲げる際、旗にもはや指一本触れようとしない者は、道徳的=感性的に禁治産者であるとのレッテルを貼られる危険がある。」<sup>26</sup>

24 ibid. S.409.

25 初出の日付を見れば、1990年10月3日の東西両ドイツの統一を受けて書かれたものであるように思われるが、実際には統一の動きが加速していく3月から4月の状況が描かれている。

26 Martin Walser : Vormittag eines Schriftstellers, Werke, Bd.11, S.955.

まかり通っている意見とは、ドイツはユートピアを目指すべきだ、というものである。それを目指す者、道徳的に問題がある人物と見なされる。では、その場合の「ユートピア」とは何だろうか。ヴァルザーは、さらに以下のようにつける。

「ヨーロッパ各国が互いに成長していくこと、経済や生活が国際化していくこと、それらは我々が（二度と）悪夢を引き起こさないことを担保するためのものなのである。」<sup>27</sup>

ユートピアとは、どの国も突出することなくヨーロッパ全体がともに成長し、そのためにドイツがあらゆる私的な利益を度外視して協力していくことである。しかしそこにヴァルザーは疑問を投げかける。

「もはやそんなことはするな、二度とそんなことは起こすな……これ以上はっきりした教えが他にあるだろうか？」<sup>28</sup>

新しい秩序を打ち立てようとする前に、過去の重荷を背負って、二度と起こさないという誓いを立てることこそが重要である。この引用の主眼はここにある。

エッセイ「ある作家の午前」の主張は、すでに明らかである。批判の対象となっているのは、再統一へと向かうドイツの状況である。周知のように、統一すれば約8千万もの人口をかかえる大国となるドイツは、ベルリンの壁崩壊当時から、ふたたび世界の脅威となるのではないかという疑念を他国から抱かれていた。それを払拭するための方策として、時の西ドイツ首相ヘルムート・コールは、欧州統合に積極的に尽力することを繰り返し強調した。<sup>29</sup>ヴァルザーが「ユートピア」と言う時、その背後にあるのはまさにこの状況である。たしかに欧州統合の理念自体何の問題もない。ヴァルザー自身もそこに異を唱えているわけではない。問題なのは、そのように「ユートピア」を求める論調のみが正しいとされ、そこに歩調を合わせようとしない者を白眼視する社会のあり方である。

ここで、本章の冒頭に挙げた疑問——ドイツ人が変わったのか、ヴァルザーの見方が変わったのか——も自ずと解決されたことになる。統一前、互いに自己完結していた東西両ドイツは、統一に向かう中で、そろって過去を振り返るところか、ユートピアを夢見始めた。他国が感じる脅威の原因が自らの過去にあることは、ドイツ人自身、当然分かっているはずである。しかし、分かっているながら、明るい未来ばかりが強調される。これもまた演技ないしはパフォーマンスと言えるのではないだろうか。統一にからんでヴァルザーが新たに認識し始めたこの「演技」という

27 ibid.

28 ibid.

29 このあたりの経緯については、たとえば『近代ドイツの歴史』（若尾祐司・井上茂子編著、ミネルヴァ書房、2005年）306～307頁に詳しい。

キーワードによって、エッセイ「ある作家の午前」と『幼年時代』はつながっている。たしかに、分裂時とその後において、ヴァルザーが取り上げる問題の内容——分裂時は「自己完結」、その後は「演技」——は異なる。しかし、それはドイツの変化を冷静に見つめ、それを率直に文章化した結果に過ぎず、ヴァルザーの視点あるいは思想の変化ではない。

\*

冒頭に紹介した「平和賞講演」も、この枠組みで理解することができる。本稿で着目していたのは、以下のような文言であった。

「私は目をそらすことを学ばなければなりませんでした。」

「強制収容所の様子を映した一連のもっとも残酷な映像から、たしかに私はすでに20遍も目をそらしました。」

これらは、ナチズムへの反省を放棄することを宣言するものではない。上で見たような、真摯に反省しているように見せながら実は反省する気などない、あるいは、明るい未来を積極的に提唱することで、過去から目を逸らさせる、そのようなパフォーマンス的な行動に対して明確な「ノー」をたたきつけるためのものである。

「我々の消えることのない恥を責め立てる知識人たちは、そうすることでたった一秒でも幻想に陥っているということはないでしょうか。つまり、自分たちはまたしても恐ろしい想起の作業にたずさわったのだから、少し免責されたはずだ。それどころか、一瞬の間、加害者よりも被害者に近づいたのだと。」<sup>30</sup>

ヴァルザーによれば、ナチズムのもとに行われたあれほどの残虐な行為について、平然と語り、人前で証拠を提示できる方が欺瞞である。そのような態度は、外見上直視しているように見えながら、実は直視してはいない。本当に過去の罪を引き受けその重大さを認識しているならば、むしろ直視できないはずであり、それこそが健全な人間の反応である。

ヴァルザーは明言する。

「私は、糾弾を受ける側を離れることができるなど、一度も思ったことはありません。」<sup>31</sup>

---

30 Die Walsler-Bubis-Debatte, S.11.

31 ibid.

\*

ヴァルザーは、再統一という大きな転換期にあって、その間に生じた変化に敏感に反応し、それらが意味するもの、およびそれらが孕む問題を冷静に分析していた。したがって、彼にとって再統一後初の長編小説である『幼年時代』は、自らが感じたドイツの変化をそのまま映し出す鏡であると同時に、たえず社会に対して問題を投げかけてきた彼のその後の仕事の新たな出発点でもあった。だからこそ、90年代以降のヴァルザーを知る上で重要な鍵となり得るのである。

## **Die Vergangenheitssucht – Über den Tod des Helden in Martin Walsers „Die Verteidigung der Kindheit.“**

WATANABE Masanao

In Martin Walsers erstem Roman nach der Wende „Die Verteidigung der Kindheit“ (1991) handelt es sich um einen Helden, der krankhaft die Sachen sammeln will, die mit ihm selbst oder mit seiner Heimatstadt Dresden etwas zu tun haben. Aber bevor die Arbeit vollendet wird, stirbt er mit 58.

In den vorangehenden Forschungen deutet man seinen Tod als den notwendigen Schluss des Menschen, der vor Vergangenheitssucht dem wirklichen „jetzigen“ Leben entflieht. Aber diese Deutung ist falsch, weil der Held, Alfred, zwar voll von Leid, doch wenigstens auf dem Lebenslauf als Oberregierungsrat sehr erfolgreich ist. Obwohl er krankhaft sucht, entflieht er der Wirklichkeit nicht.

Das Wichtigste ist die Szene der Trauerfeier Alfreds, die in den letzten zwei Seiten geschildert wird. Da ist etwas komisch : Alle Anwesenden zeigen das Gesicht der Erleichterung. Beim Sammeln bat Alfred Verwandte und Freunde um ihre Unterstützung. Aber das wollten sie eigentlich nicht, weil sie sich nicht für die Vergangenheit Deutschlands interessierten, sie sogar einschließlich der Schuld vergessen und nur die glanzvolle Zukunft ausmachen wollten. Jetzt sei der Mensch gestorben, der uns an die Vergangenheit binden wollte—Das ist der Grund der Erleichterung.

Der Titel „Die Verteidigung der Kindheit“ führt uns einfach zum Missverständnis, dass dieses Werk „Gegen das Vergessen der Vergangenheit“ zum Thema hat. Es verneint diesen Versuch nicht, aber das noch wichtigere Thema ist die Kritik an den Leuten, die die Vergangenheit Deutschlands vergessen wollen.

